

平成22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム  
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」  
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

## I. 自主企画の内容

### (1) 企画の名称

「戦前期日本の教育・メディア・身体」

### (2) 開催日時・会場

2010年12月18日(土) 13:00~17:00 N棟339室

### (3) 講演者

島岡 哉 (仁愛大学人間学部コミュニケーション学科講師)

濱千代 早由美 (皇學館大学非常勤講師)

### (4) 企画者

岡崎 沙織 (奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻)

村田 賀依子 (奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻)

### (5) 支援教員

小川 伸彦 (奈良女子大学文学部人文社会学科准教授)

### (6) 参加人数

8名 (内訳: [学内]教員2名, 大学院生4名, [学外]2名)

### (7) 自主企画概要

さまざまな史資料や調査事例と如何に向き合い、どのような手法を用いて研究論文に練り上げていくか。これらは、研究に携わる多くの人間が抱えている課題である。本企画では、戦前期日本における各種メディアを事例として研究されている先生方に話題提供をしていただき、報告者、セミナー参加者それぞれの研究素材が持つ可能性と展望を探った。

講師の島岡哉先生からは、研究蓄積の少なかった戦前日本の「巡回映画」を研究対象とするに際し行ってきた、研究手法や研究枠組み、理論をめぐる試行錯誤の過程をお話しいただいた。濱千代早由美先生からは、氏の研究のいわば副産物として発生したという「伊勢音頭の正調化」をテーマに、事例をどのように研究にまで高めていくかについてご講演いただいた。

た。院生からは、戦時下における文部省推薦図書の書評のなかから子ども向け図書を事例として取り上げ、史料から何を読み取るか、史料を如何に扱うかという現時点まで辿ってきた模索の結果を報告した。

## II. 実施報告

### 1. 基調講演

#### 1.1 戦前期を対象としたメディア研究の蓄積・可能性・困難

##### —ライブラリー・ワークとフィールド・ワークのはざまで—

島岡哉（仁愛大学人間学部コミュニケーション学科講師）

本講演では、島岡氏ご自身の研究の歩みと専門とする領域の研究潮流を対比させながら、ライブラリー・ワークとフィールド・ワークをどのように接合するか、フィールドで集めたデータをどのような切り口で分析し論文化するかについて発表された。

島岡氏は農村社会学とメディア論の接合、および農山漁村社会の社会変動の観点から、これまで主に2つの研究を行ってきた。第一に、近代化と戦前期農山村における移動映画（巡回映画）がどのように受容され利用されてきたかについてである。具体的には奈良県吉野郡野迫川村、上北山村での長期にわたるフィールド・ワークに基づき、「農民は映画というイデオロギー装置によって啓蒙され主体化される存在」といった既存研究とは異なる見解を出し続けてきた。たとえば、移動映画を用いた映画上映会が、勸進興業の形態を継承して村落の近代化のために行われた。また、女性たちにとっては、「家」からのアジールとして機能していたり、村の名望家たちが映画を積極的に利用して自らの村の自画像を構築し発信しようとした姿を明らかにしてきた。

第二に、現代における移動映画や映画上映会に注目し、研究者でありともに活動する者として関わってきた。たとえば、名古屋市の移動映画会社「シネマ雄」にアルバイトとして関わりながら、その実践をエスノグラフィーとして論文化した。三重県尾鷲市で、市民有志が立ち上げた「ロマン座シネマ倶楽部」に参加し、映画上映を通じた地域活性化にも取り組んでこられた経緯をお話になられた。

島岡氏は報告を通して自分の研究対象や理論枠組みを用いる際の注意点として、ご自身の経験を踏まえながら以下の4点を強調された。まず、視野狭窄にならないように心掛ける点である。社会学がご専門の島岡氏は、農山村の移動映画を分析する際に、農村社会学やメディア論の既存研究の中には対象事例を分析する道具が見当たらなかった。そのため、民俗学や歴史学、人類学などの専門分野以外に視野を広げて、分析のツールを模索したことである。

2点目は、援用する分析概念やその背景にある理論のコンテキストを十分に吟味・検討する必要性についてである。たとえば島岡氏は、修士論文で民俗学の「買い芝居」「勸進興行」の概念を、社会学からはアルフレッド・シュッツの「the stranger」概念を用いて考察した。ところが口頭試問において、無理のある分析や概念適用があると指摘をうけた。とりわけシュッツの「the

stranger」概念は、理論的背景を踏まえると論文への援用や分析概念としての位置付けが不適当との批判があった。さらに、他の論文を執筆する際にも人類学の「文化的自画像」の概念を援用しようと試みたが、この概念を日本の農村研究に持ち込む際の手続きや妥当性について、指導教員や院生仲間と激しい議論をしたという。表面的な概念の意味や理論的なわかりやすさだけをみて、自分の事例を分析するのに役立つと思えば飛びついて使ってしまうという、大学院生が陥りやすい状態については、経験を交えてご紹介いただき、非常に身の引き締まる思いをした。

3 点目は、調査方法についての自問である。記憶と記録の関係について提起された。インタビューが難しく、また村の記録がほとんど残っていない事例について、どのようにアプローチしていったらよいか。何を記録や資料ととらえるのか。限られた記録・資料で「実態」が描けるのかどうかについて、歴史研究やオーラルヒストリーなどの視点も踏まえてご報告があった。これも古い時代を扱う人々にとっては悩む点である。

4 点目は、自分が取り上げる事例や対象の現代的意義を常に考える必要性である。そのためには、対象とする事例がどの研究分野でどのように考察されてきたのか、またどのような概念や理論で分析されてきたのかの 2 点において、研究史を踏まえる必要がある。島岡氏は、戦前期日本のメディア研究の最近の潮流として、「歴史研究」が再来しているのではと問題提起された。具体的には、広田照幸氏・佐藤俊樹氏の論文を紹介しつつ、近年の院生が戦前期に強い関心を持って研究に取り組んでいる現状を、メディア史研究会や教育史学会等の報告タイトルを紹介しながら説明された。伝統と近代という 2 分法に陥らないようにする工夫、雑誌の内容分析や言説と社会背景との関わり、研究潮流自体が持つイデオロギー性等も踏まえたうえで、慎重に扱う姿勢の重要性を指摘された。

## 1.2 民謡の正調化過程とメディア ——文化資源としての民謡の活用——

濱千代早由美（皇學館大学非常勤講師）

第一報告の島岡氏の内容を引き継ぎながら、濱千代氏が研究の副産物として得たものを研究にまで高めていくプロセスと問題意識の明確化の過程を示された。具体的には、伊勢音頭の正調化を事例に、文化資源としての民謡活用について検討した。民謡という人の身体を通じて伝えられるバリエーションの豊富な芸能が、どのようなプロセスを通じて正調化されていったのか。とりわけ、おかげまいりという形をとって移動する身体、移動する身体が持つメディアとしての側面、近代化する中での産業や地域の知識人と民謡の変容を中心に、報告された。

濱千代氏は、フィールドの伊勢という土地を研究する際に、歴史的な歯止めをどこにするか、つまりどの時代までを研究対象とするかの問題点があった。この地は、宗教学者、歴史学者、民俗学者など広範な研究分野にわたって研究対象となり、研究の蓄積があるからだ。そのため、伊勢そのものを研究するという正攻法だけでなく、「外堀から埋める」という手法をとった経緯を説明された。「外堀から埋める」とは、社会学やメディア論の知見をも用いて、現代の学問的知見から伊勢を捉え分析する手法である。

正調化以前の伊勢音頭は、非常バリエーションに富んでいた。現在の「正調伊勢音頭」につながるものは、盆踊りで歌われた河崎音頭・古市音頭系、参宮の道中で歌われた道歌系、お木曳きの際に歌われた木遣系の三つの系統がある。さらに、これらの要素を複合して花柳界で御座敷用に工夫されたものもある。「かたちのない」伊勢土産としてこれらの音頭が伝播していったが、人々が参宮の際に何を見聞したかによって、伝わった内容が異なっていたと指摘する。

伝達経路としては、参拝の土産話という伝統的な経路と、名古屋の遊郭をはじめとするお座敷踊りや『伊勢音頭恋寝刃』という歌舞伎などの興業に関する経路の二つがあった。これらによって「古市」や「河崎」という伊勢地方のローカルな音頭から、「伊勢」というより広い地域を指す名称を冠した音頭となって一般化した。また、土産用の歌詞集や歌本が遊郭を中心に販売されていた。しかしながら、明治時代になると鉄道の普及や社会情勢の不安から、歌舞や音曲を禁止するようになり、伊勢音頭は衰退の一途をたどった。

このような、近世以前も含めた伊勢音頭の歴史を踏まえたうえで、濱千代氏は、明治20年代の民謡ブームや、明治末から昭和初期の新民謡運動を背景に、伊勢音頭も正調化の模索が開始される過程を解きほぐしていく。特に昭和初期には、歌詞、囃子、振付等の統一が新聞とのタイアップや地元の知識人である畑嘉門の手によって積極的に行われた。第二次世界大戦後は、観光協会が中心となり、正調伊勢音頭の普及・後継が実施されている。こうして、多角的な視点と近世から現代までの豊富な資料を提示されながら、議論が展開された。

報告の最後に、濱千代氏は文化資源として民謡を考える5つの視点を提示された。まず、伊勢音頭の変化は、人の往来（移動）によって変質してきた点である。畑嘉門ら地方知識人の影響も大きな要因としてあるが、それ以上に「参宮」という行為そのものがメディアであるという視点を提示された。第二に、伊勢という聖地の成立に、近代のメディアが大きな影響を与えている点である。伊勢参りを促した「御師」や実際に伊勢参りをして伊勢音頭を持ちかえった人の往来だけではなく、鉄道網の発達や新聞とのタイアップにより、伊勢を効果的に宣伝することを通して伊勢が聖地として成立してきた点を指摘した。第三に、民謡ブームとツーリズムとの関係も提示された。伊勢音頭がツアーに組み込まれた旅行や、伊勢音頭のレコードの発売、ガイドブックの出版などの事例は、近代の旅行業の成立と民謡の変容、伊勢の聖地化のダイナミズムを示していた。第四に、観光・娯楽と鳥居前町の関係という地域社会の変容に関する考察がある。伊勢音頭にかぎらず、遊郭などの一大レジャーランドが、民謡を資源として活用している点も見逃せない。最後に、近代化によって「伊勢」が拡大し受容されていく点が指摘された。伊勢というイメージの変化、伊勢をモデルに建設された明治神宮の事例などを通し、伊勢という場所がシンボルとして機能している点などをあげられた。

## 2. 院生による研究報告

### 2.1 戦時下における文部省推薦図書 ——読む人、書く人、読ませる人——

岡崎沙織（奈良女子大学人間文化研究科 博士後期課程2年）

院生からは、戦時下の日本において文部省主体で展開された推薦図書制度を事例として取り上げ報告を行った。文部省が巷に流通している出版物の中から、特定の図書を「文部省推薦」と定めて公的に発表し、国、都道府県のものをはじめとする各種団体機関紙や新聞を用いて本を宣伝したこの制度は、1930年に開始され、その後戦争色が濃くなっていく過程で、本を選定するメンバーの増員、組織の整備、ラジオ放送の宣伝活動への利用等を行うことでシステム自体を強化し、1945年の敗戦により終止符を打たれたものである。

この制度は、本を宣伝する際書評を用いた。本発表をした時点で確認されていた文部省の推薦図書（以下文推薦図書）は900冊強にのぼったが、その多数に関して文部省が発表した書評が残されており、今日それを見るのが可能である。一冊の本が作者から発信されて具体的な読者に受信されるまでの過程というものを考えてみた場合、本—読者間に媒介（者）が存在するケースを様々考えることができる。つまり人と本との間に、様々な形で両者を出会わせ結びつけようとするもの（人）が存在する訳である。具体例としては書評、広告、また教師等個人の読書に際して指導的な立場を占めうる人物を想定することが出来るだろう。今回報告者は、文推薦図書の豊富な書評の蓄積という史料の状態から、書評という形で、ある人が本と読者を媒介する形態に焦点をあてた。特に当時子ども向けとして選ばれた図書に関して書かれた書評を取り上げて、史料から何を読み取るか、何を読み取ることが出来るか、そして史料を如何に扱うかという現時点まで辿ってきた模索の結果を報告した。

文推薦図書の場合、既に述べたように主体となったのは文部省である。当時図書の推薦を行うために、「図書推薦委員会」と呼ばれる組織が文部省内に設置された。この組織は「調査員」及び「推薦委員」とそれぞれ名付けられたメンバーから構成されるものであった。「調査員」は膨大な出版物の中から推薦図書の候補を選定し書評を書く役目を負い、「推薦委員」は「調査員」から提出された図書の候補をさらに吟味し最終的にどの図書を文推薦図書とするか決定を下し発表を行うまでを担当したようである。図書の選定に関わった具体的なメンバーには、例えば大学教員や児童文学者のように、文部省の役人以外の肩書を持つ人間も含まれていた。しかし報告者は今回、こうした人々が名目上「文部省の」図書推薦という事業に関わっていたということで、人と本とを国家の一機関が媒介したケースと大きく捉えることが出来ると考え、そうした方向で発表を行った。

文推薦図書の個々の書評を検討する際、報告者は書評という史料を以下のような性質のものとして捉えていた。すなわち書評を書いた人間が、各図書に期待した機能（知識習得、覚悟や自覚といった心的態度の方向付け等）をそこには読みとることが出来、またそうした図書の持つ機能を受けるに相応しいと思われていた相手を読み取ることが可能なものであるというのが、報告者が今回の発表に際して立った前提である。

報告者は、1940年以降のこども向け推薦図書の書評中しばしば用いられた「第二の国民たる少年」「次代を背負ふ青少年」「少国民」等のこどもの表現の仕方に注目した。報告者はこうした表現の背景には、こどもを国家の構成員として積極的に捉えていこうとする姿勢がうかがえると考えた。こどもを対象読者に想定して推薦された図書には、当時英雄として讃えられた軍人の伝記物語のように戦争賛美に結び付く内容のもの、日本が当時深く関係していた中国満洲地域の土地情報を与えることを意図したもの等が含まれており、時局的な印象を受ける。また戦時下の文推薦図書では、科学知識をこどもにも容易に理解できる形で提供する図書、科学的な思考の養成を目指す図書が目立つが、その背景に科学を国家に資する有効なものとして捉える見方が横たわっていたことは看過できない。こうした図書の傾向から、それらを読むことを望まれていたこどもがいかなる存在であるかを考えてみた場合、大きく以下の三つに表すことができよう。すなわち①軍事に関する知・情報を身につけるべき存在、②植民地はもちろんのこと、その他の地域も含めたアジア全体における当時の日本が占めていた優位的な立場を継承するべき存在、③国家に資する知識を身につけるべき存在である。これらのこども像には、当時自明視されていた国民としての義務が投影されていると言える。ただ先に挙げた「第二の国民」という表現が端的に示しているように、こどもの占める位置は大人のそれと完全に一致するものではない。よって、「国家のため」に収斂されていく諸々の情報・知を獲得することが求められる点は大人と同様であるが、「第二の国民」としてのこどもに対して求められるものもあった。それは例えば、徴兵されるそう遠くはない未来に備えて軍事に関わる知識を蓄積することであり、あるいは周辺諸国に対する優越した立場を継承する自覚を育むことであったのである。

### 3. ディスカッション・質疑応答

基調報告者2人の議論を踏まえ、院生報告に対するアドバイスやディスカッションが出席者全員により行なわれた。要点は以下の4点にまとめることができる。

まず研究素材の対象選定に関してである。文部省推薦図書の書評から、何を明らかにしようとしたのか、選定した資料からどのような仮説を導くことが可能かを明確にする必要がある。また、戦時下という対象時期が持つ特殊性と歴史的な連続性についてふまえる点を指摘された。

第二に、文部省推薦図書に関する言説が持つ可能性と限界についてである。学内教員の鈴木康史氏からは、文部省推薦図書が当時人々にどのように読まれていたかについての解明は難しい。それよりは、推薦図書は誰を対象としてどのように読ませようとしていたのかといった主体の関係性や、出版業界と教育業界の結びつきなど、産業論的な教育史研究の展開可能性について発言があった。

第三に、島岡氏からは社会学の視点から、教育史の近接領域である教育社会学の研究蓄積の存在・手法についてのアドバイスがあった。教育社会学の領域では竹内洋、広田照幸らに代表されるように、近代日本における教育制度の変動や展開に関する研究がすでになされている。それらの潮流を踏まえ、文部省推薦図書に関する研究をどのように位置づけるかが今後の課題であると指摘された。

第四に、濱千代氏や鈴木教員からは、現実的な論文作成の手法についてアドバイスがあった。具体

的には、まず資料の分類や整理を行い、自分の持つ資料の価値や資料から導かれる論点を導き出す。自分の持つ資料を十分に吟味し利点と欠点を見極めるよう説明があった。次に、自分が対象とする時代に関連する文献を多読する作業の必要性が提示された。新書などの軽めの本を一日一冊読破を目標に、読む作業を通じて、論点や着眼点を獲得するようアドバイスいただいた。その作業を行いながら、専門書を読み進め、論文をまとめていくという手法が提示された。修士課程まで漠然と研究をしがちであるが、博士課程に入り、一度は資料の分析や論文執筆の方法で行き詰る経験があるとおもわれる。そのようなご経験を踏まえ、うえて研究の具体的な進め方について懇切丁寧にアドバイスいただいた。今後の院生生活を過ごすにあたり大変参考になった。

#### 4. 総括

本セミナーは出席者が8名と少人数ではあったが、異領域で近接する研究を行なう若手研究者や院生間、さらに教員間の交流の場になった。研究手法の点では、事例を分析したり研究を位置づけたりする際に、柔軟な思考が必要とされる点も学ぶことができた。とりわけ、島岡氏が基調報告で紹介された広田照幸氏によると、1990年代において、戦前期を対象とする研究群の「視点の平板化」が問題視されていた。広田氏の指摘を踏まえ、なぜ2010年代に戦前期を扱うのかその現代的意味を再考したうえで、研究に取り組まなければならないと痛感した。

さらに、研究に躓いた時の対処法や、論文を執筆する上での基礎体力の獲得法など、日頃疑問に感じていたことについても詳しくアドバイスいただいた。本セミナーを通して、このような機会を持つ重要性に改めて気付かされた。

なお、本セミナーでは女性研究者共助支援事業本部による集団託児を利用した。利用者は講師の島岡氏1名であったが、子どもを持つ男性・女性研究者（教員・院生）のニーズを先取りした取り組みにも試みる機会にもなった。

（文責：岡崎 沙織）